

『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 54 回 第 11.2.7 節～第 11.3.1.3.1 節

2020 年 3 月 15 日

小 田 勝

前回、「知り顔」「知れり顔」を取り上げて、この下線部が終止形か連用形か分からないと述べたが（本書では終止形と考えている）、「したり顔」という連語もあって、中古から現在まで用いられている。

ところで、助動詞「たり」と「り」に話がそれるのだが、三省堂の『全訳漢辞海〔第 4 版〕』の「訓読のための日本語文法」には、

完了「たり・り」は、和文では 82% が「たり」、18% が「り」、訓読では 28% が「たり」、72% が「り」。(1734 頁。原文縦書き、数字は原文漢数字)

とあって、『源氏物語』を和文の代表のように考えている私には、意外な数値に思えた。『源氏物語』では、本書 137 頁に示したように、「たり＝4348 例 (56%)、り＝3420 例 (44%)」である（この数値は、本書凡例 5 (ii 頁) に示した『CD-ROM 角川古典大観 源氏物語』によるもの。勉誠社の『源氏物語語彙用例総索引』別冊の「数表」では「り＝3415 例、たり＝4348 例」、日本語歴史コーパス「中納言」では「り＝3447 例、たり＝4334 例」である）。そこで改めて調べてみると、『枕草子』では、「たり＝1540 例 (89%)、り＝182 例 (11%)」と、「たり：り」の割合が 9 対 1 で、『源氏物語』とは大きく異なっていた（右文書院の索引による。「中納言」では「たり＝1545 例、り＝184 例」）。ほかの作品を「中納言」で調べてみると、『源氏』を入れない中古の 10 作品（竹取・伊勢・土佐・大和・平中・蜻蛉・落窪・枕・和泉日記・紫日記）の合計値は、「たり＝4101 例 (78%)、り＝1167 例 (22%)」、これに『源氏』を加えると、「たり＝8435 例 (65%)、り＝4614 例 (35%)」になる。もっと和文の資料数を増やせば、『全訳漢辞海』の示す数値になるのだろうか。

さて、334 頁「11.2.7 終止形・連用形による連体修飾」の続きからであった。用例 (1) (2) (4) の類例をあげる。

- ・富士の嶺のならぬ思ひに燃えれば燃え神だに消たぬむなし煙を（古今 1028）
- ・世をうちのむなし涙や霞みけん難波の春の月の昔に（草根集）

- ・ 世に無し者ども (=世=用イラテイナイ者ドモ)、三千人も付きてぞ候ひつらん。(平治)
- ・ 春立たたばまづまる (=私ハ) 植えじ肥ゆ水の得ずはさは悪^あしさてややみなん (好忠集所収源順百首)

次例について、大系の頭注は「諸本かく作る。下二段活用の他動詞による、終止形の連体法であることに注意。」とし、日本古典文学全集(旧版)の頭注も「下二段で、終止形による連体法の例とみる。」としている。

- ・ 虫などをば、塵ばかりのことせむに (=チョットシタコトデ) 必ず殺しつべきに、生
くやう (=生カス(蘇生サセル)方法) を知らねば、罪を得ぬべければ (今昔 24-16)
この後に、節を新設する。

11. 2. 7' …所の(新設)

「連体修飾語+名詞」の意が、「連体修飾語+所の+名詞」の形で表現されることがある。漢文訓読から生じた語法である。

- (1) 紀貫之、凡河内躬恒等が撰べる所の古今集をこそは、歌のもととは仰ぐべきことなるを (歌合 172 御裳濯)
- (2) 殺す所の鳥を首に掛けさせて (徒然 162)

第 11.2.8 節～第 11.3.1.2 節まで (334～337 頁) は、今のところ、補足すべき事項が見当たらないので、338 頁「11.3.1.3.1 助詞「の」「が」による追加型モノ準体句」に飛ぶ。同頁◆の上 5 例の類例をあげる。

- ・ 丹つつじの句はむ時の桜花咲きなむ時に (万 971)
- ・ 白雲のたなびく国の青雲の向伏す国の天雲の下なる人は (万 3329)
- ・ 同じく作れる対策(=答案)の、思ふままに答へたる対策の文ども、おもしろく興ありて (うつほ・俊蔭)
- ・ 野焼きなどするころの、花はあやしう遅きころなれば (蜻蛉)
- ・ なま心おとりしたる人の、知りたる人と (枕・大系本・125)
- ・ 見れば、額に角生ひて目一つ付きたる物の、赤き犢鼻褌(=褌)したる物の出で来て、ひざまづきてゐたり。(古本説話集 61)

また、同◆の下6例の類例をあげる。

- ・ かの内の大殿の御むすめの、^{ないしのかみ}尚侍のぞみし君も (源・真木柱)
- ・ それ (=恐ロシイ猪) をだに何とも思ひたらず、心に任せて殺し取り食ふことを役とする者の、いみじう身の力強く、心^{たげ}猛く、むくつけき荒武者の、おのづから出で来て (宇治 10-6)

339 頁 5 行目の用例は、初刷～第3刷で「御心ざしあるのは」となっているが、「御心ざしあるさまのは」の誤記であったので、第4刷で訂正した。

この第 11.3.1.3.1 節では、同格構文の様々な用例を示している。この補遺稿でも大いに補いたいのが、同格の後項の最大、最短のものとしては、どのようなものがあるだろう。後項が比較的長い例、

- ・ 容貌^{かたち}きたなげなく若やかなるほどの、おのがじしは塵もつかじと身をもてなし、文を書けど、おほどかに言^{こと}選りをし、墨つきほのかに心もとなく思はせつつ、またさやかにも見てしかなどすべなく待たせ、わづかなる声聞くばかり言ひ寄れど、息の下にひき入れ言^{こと}少なる△が、[欠点]いとよくもて隠すなりけり。 (源・帯木)

また、後項が短い例をあげておく。

- ・ このあらん命、葉の薄き△がごとし。 (源・手習)
- ・ 童の立てる△、あやしと見て、「……」と言へば (堤・虫めづる姫君)

次例では同格の名詞句に接尾辞「ども」が付いている。

- ・ 鈍色のこまやかなる△がうち萎えたる△どもを着て (源・若紫)

以下、様々な同格の句型の類例を、順次あげることにする。339 頁用例(6)～(8)の類例、

- ・ かく言ふは、播磨守の子の、蔵人より今年^{かうぶり}冠得たる△なりけり。 (源・若紫)

340 頁用例(10)(11)の類例、

- ・ 筑紫に流され給へりける皇子の、やがてそこにて亡^うせ給ひたりける御むすめの、いとかすかなる乳母につきて、京へも上^{のぼ}らでおはしけるを (浜松)

以下は、次回に続く。

[出典追加] 歌合 172 御裳濯 御裳濯河歌合 (1187 年か)